昭和28年紀州大水害

災害体験記

『あれから50年・昭和28年水害記録～土砂災害の証言～』

〔平成15年7月編纂より抜粋〕

和歌山県

県土整備部 河川･下水道局 砂防課

目　次

災害体験記

（１）有田川流域の方の体験記

〔花園村〕ＢＴさん（男性） ---------- 3
〔花園村〕ＳＪさん（男性） ---------- 5
〔花園村〕ＫＲさん（女性） ---------- 7
〔清水町〕ＩＫさん（男性） ---------- 10
〔清水町〕ＮＴさん（男性） ---------- 12
〔清水町〕ＵＴさん（男性） ---------- 14
〔金屋町〕ＨＴさん（男性） ---------- 16

（２）日高川流域の方の体験記

〔龍神村〕ＯＮさん（男性） ---------- 19
〔美山村〕ＩＩさん（男性） ---------- 21
〔美山村〕ＫＳさん（男性） ---------- 23
〔美山村〕ＮＭさん（男性） ---------- 25
〔中津村〕ＨＪさん（男性） ---------- 27
〔中津村〕ＳＫさん（男性） ---------- 29

（３）貴志川流域の方の体験記

〔美里町〕ＡＫさん（男性） ---------- 32
〔美里町〕ＭＹさん（男性） ---------- 34

（４）熊野川流域の方の体験記

〔本宮町〕ＯＭさん（男性） ---------- 37
〔熊野川町〕ＳＴさん（男性） ---------- 39
〔熊野川町〕ＴＭさん（男性） ---------- 41
〔熊野川町〕ＴＳさん（男性） ---------- 43

災害体験記

（１）有田川流域の方の体験記

〔花園村〕ＢＴさん（男性）

昭和 28 年当時：年齢＝23 歳　　職業＝会社員

【被災時】

災害が起こった時は大阪で暮らしていて、新聞には「花園村全滅か？」等と書かれていた。

【花園村に戻ってきた時】

昭和 30 年 10 月、村の災害復旧のための役場職員として村に戻った。村は見る影もない状態だった。北寺集落は全滅、役場や森林組合等の公共機関も壊滅、道路は寸断、農地のほとんどが流失、村は全てが地獄のようで住民はなす術もなく立ちつくしていた。

子供の頃によく遊んだのどかな川が荒れて形がなくなり、Ｖ字型だった川がＵ字型になって、5m 程だった川幅も河床が上がったことで 30m 程に広がっていた。道路はなくなり車は川原を走り、橋は全部流れてしまった。住居は応急住宅が整備されていたが、農地問題は解決していなかった。畑は残っているものもあったが、田んぼは全滅だった。

【復興】

本当に大変だった。夜も寝る間がないくらい忙しかった。道や農地の復旧のための設計や測量に人手がなく、経験のない者までも作業をしなければならなかった。

和歌山市へ出張する時は、道がなくなってバス等も通れなかったので土の道を歩いて高野山まで行って、電車に乗ったり材木を運ぶ車の後ろの荷台に乗ったりしながら行った。

感じ方は人それぞれだが、道が安全に復旧するまでには 7 年くらいかかったように思う。当時は台風や大雨でよく災害が起こったので少し復旧したと思ってもまた被害を受けた。

災害前にあったのどかな渓谷なども、今もそのままなら観光名所になっていたかもしれない。災害をきっかけに村は全く形を変えてしまった。その災害を乗り越えて、村民は新しい村づくりに一生懸命努力をした。その結果いくつもの施設を備えた現在の村になりました。

【災害の要因】

災害当時は戦後復興のため必要な材木を伐採して裸山が多くなっていたことだと思う。

【教訓】

災害の怖さは災害を経験した者でないと分からないと思う。

災害が発生してどこかに避難しようとしても、どこが安全なのか分からない。川からの水は高い所に逃げた方がいいけれど、山に逃げると土砂災害の危険が出てくる。しかも、どこが崩れるか分からない。そういう時のために先祖から受け継いだ情報や自分の知恵をもとにして、一人ひとりが安全な場所を見つけておかないといけない。

〔花園村〕ＳＪさん（男性）

昭和 28 年当時：年齢＝42 歳　　職業＝林業・農業

【被災時】

その年の夏は長雨だった。取り入れた麦を乾かそうと思ってもなかなか乾かず、7 月 17 日も夜 10 時頃に作業を終えて家に帰ってきた。その日も雨が降って「ひどい雨やなあ」と思いながら眠った。

夜中の 3 時頃に目を覚まして、外を見ると今まで見たこともないような豪雨が降っていた。豪雨にもかかわらず時々雷の音が聞こえる程度で、雨は音を立てることもなく風が吹くこともなく静かに降っていた。庭は池のようになっていて裏の石垣からか水が滝のように流れていた。

4 時頃外はほんのり明るくなって、村の人たちが異変に気づき起き始めていた。雨は同じ調子で降り続き、番傘を差してしばらく歩くと傘が破れるほどだった。そのような状態が 8 時頃まで続いた。家の外に出ると村の様子がよく見え、ずっと眺めていると、だんだんと明るくなって雨で霧がかかったような様子の中、川沿いの家は全部流され他の家も次々と流されていくのが見えた。

あちこちで山が崩れるのが見え、ゴーゴーと音がしていた。山の崩れ方には 3 種類あった。1 つ目は、風も吹いていないのに山のてっぺんの木が動き始めたかと思うと、一気に全体が崩れていく。2 つ目は、下から少しずつ少しずつ崩れていく。3 つ目は、山のてっぺんから丸くなり、三角になって少しずつ滑っていく。

1 つ目の崩れ方が一番激しかった。一瞬よりも、もっと速いスピードで崩れていく。それが起こると、現場が見えない場所でも音がして土煙があがるのが見えた。夜だと空気の関係か摩擦の関係か原因はわからないけれど光も見えた。近くで崩れると、土煙と同時に木の焦げたような臭いもした。台風の時のような激しい風が吹いて草木がなびいていた。

上流で崩壊があった時は、激しい土煙と同時に、枝や根のついたままの木が立ったり倒れたりしながら流れてきた。川を見ていると 9 時か 10 時頃、普段は 50m ほどの川幅が 100m ほどに広がっていた。

10 時頃、急に水が少なくなったので、上流のどこかが堰止められたような気がした。少しするとゴーという激しい音と共に、一気に水が流れてきた。水は流れるというよりも波のように下がってきて、通り過ぎた場所には何も残っていなかった。後で分かったが、それが北寺の崩壊だった。

その後も雨が降ったり止んだりする天気が続き、ゴーという音がして、至る所で崩壊が発生していた。

斜面にある農地では谷のような水が流れていた。田んぼに水が入るといけないと思って、斜面の上に住む人は麦を敷いて道と川を一緒にして水が流れる場所を作って、田んぼに水が流れないようにしていた。

昼頃になってようやく避難しようと考え始めた。でもどこに逃げても崩れるような気がして安心できなかった。

18 日は、流れる家や村の様子を見て「あっ、あそこも流れる」「ここも流れる」と言っている間に、日が過ぎていった。

19 日になって、ようやくその後の生活や村の様子を心配する余裕が出て、他の地区を見に行くとことにした。近所の若者と一緒に犬 2 匹を連れて山の中を通って出かけた。残っている者が心配するといけないので帰る時間を約束した。

途中、川の流れが速くて渡れない場所があり、近くに物干し竿があったので棒高跳びのようにして飛び越えた。少し歩くとちょうど下流の様子を見に来た人と出会い情報交換し、役場が流れて、北寺集落が全滅し、大勢の住民が死んだことを知った。

翌日、川の水が少なくなっていた。

ヘリコプターが飛んできて食糧や新聞を落としてくれた。それまで被災したのは花園村だけなのか、日本全国が同じような状態になっているのかさえ分からなった。新聞記事を見て被災していない場所があることを知って「きっと誰かが助けてくれる」と思って安心し、また金剛寺に巨大な天然ダムができたことを知った。

【復興】

4，5 日すると川の水も少なくなって落ち着き始め、架線を引っ張って川を渡った。1，2 か月ぐらいは泥水だったように思う。

半年避難生活が続き、学校も夏休みを含めると 2 ヶ月くらい休みになった。その後、村内には 333 戸の家があったが、100 戸程が村を出た。

農地は 8 割くらい壊滅して、田んぼは 9 割くらいしか復旧していない。畑は深く掘って肥料を与えれば何年か後には復旧した。村が元の状態に戻るまでには 15 年くらいかかった。

【教訓】

人間の知恵は、究極に達すると、どんどん出てくるものだと思った。

災害を経験したことのない人には災害の怖さは分からない。「忘れたころに災害は襲ってくる。」日頃から危機感を持って生活しなければならない。

〔花園村〕ＫＲさん（女性）

昭和 28 年当時：年齢＝20 歳　　職業＝大学生

【被災時】

学校が夏休みで実家に帰っている時でした。17 日の夜中からバケツがアッと言う間に一杯になるくらいの豪雨で、目の前の人の顔も見えないぐらい降り、昼間でも暗かった。

18 日の夜明け前、川のすぐそばの家の A さんから連絡があり、父親が様子を見に行きました。その時は「大丈夫」と言ってすぐに引き返してきました。

その後あまりにも川の音が激しくなって、A さん一家は怖くなり避難したそうです。直後に A さんの家の裏山が崩れ、また避難先でも裏山が崩れてきて、近くの御堂に避難したそうです。その時私の家は特に危険ではなかったのですが、不安もあったので A さんたちと同じ御堂に避難しました。7 月にもかかわらずとても寒くて、冬服を着て行きました。

一人の若い男性が自宅の様子を見に帰った時、ちょうど家の裏山が崩れて男性も一緒に吹き飛ばされました。

午後になると少し明るくなり、雨は降ったり止んだりしながら降り続いていました。避難していた御堂の中から外に出なかったので川や村の様子は分からなかった。でも有田川の激しい音と雨の音は聞こえていました。

19 日は天気がよかったので、崩れ落ちた家から布団を引っ張り出して干したように記憶しています。その日の夜中に金剛寺の崩壊がありました。私がその様子を書いた新聞記事です。

夜半ごろ、また今までにない大きな音で目を覚ました。ドドド・・・と地響きまでして『今度こそ自分たちが・・・』と思うが漆黒の様な闇の中ではどこが崩れているかも分からず雨の中を逃げることも出来ずただ怖がっているだけだった。しかし、その音はすぐに止んで、今度は今まで高かった有田川の水位がピタッと止まってしまった。

天然ダムの上流では道も家も何もかもが水に浸かっていたので、船に乗って往来したそうです。天然ダムが決壊した時、突然激しい音がし、両親はやりかけの作業を放り投げて逃げたそうです。

私は神戸で震災も経験しましたけど、あの怖さなんか比べものにならないぐらい怖かった。

20 日は、近くで起こった崩壊の土砂によって御堂が吹き飛ばされました。その時 2 人が吹き飛ばされました。私は覚えていないのですが、私はそれを見ているはずなんです。私の日記にはその瞬間を見たと書いてあります。一人は若い男性でもう一人はお爺さんでした。若い男性は無事で自分の力でみんなの所までやって来たのですが、お爺さんは助骨を折っていて動けませんでした。それでみんなで運びました。御堂はなくなってしまい家には怖くて戻れないし、雨の中行く所がなく近くの山に避難しました。移動できないお爺さんは 1 m くらいの場所を「ここなら大丈夫か？」「ここなら崩れないか？」と言いながら動きまわっていました。やがてお爺さんは亡くなりました。

山は至る所で崩壊していました。その中を崩壊していない所を通って移動することにしたのですが、「いつ、崩れるかもしれない」という不安で一杯でした。道のない山道を父親と隣の主人が先頭になって、草木を切りながら道を作って、その後をみんなでついて行きました。麻疹の子供が 3 人いたのでそれぞれ子供を背負って歩きました。途中広い畑に木の皮等を使った仮の小屋があり大勢の人が避難していました。そこで一泊させてもらいました。

21 日はカンカン照りの暑い日だった。その日は高野山まで歩いて避難しました。

26 日になって家が残った人は家に戻りました。

【困ったこと】

驚かれるかもしれませんが、大雨が降ったにもかかわらずお水に困りました。食べ物は田畑に残っている物や備蓄している物もあり、ヘリコプターからも投下してくれ特に困ったことはなかったのですが、お水に関しては川の水は泥を含んで飲めないし、水道や井戸も被害を受けていました。湧き水を汲んで生活をしました。神戸の震災の避難生活で困ったのも、やはりお水でした。

私はその後神戸に戻ったのですが、神戸で生活していても車のブブーという音がするだけで“ドキッ”とするほどでした。学校の勉強も手につかず、村に帰る気にすらならなかった。小学４年生だった妹は災害のあまりの恐怖から心的障害のようになって夜も眠れなくなってしまい、一家で神戸に移ってきました。

【教訓】

私は平成 7 年に神戸の震災も経験しました。2 つの大災害を通して人間の力ではどんなに頑張っても自然の力を止めることはできないと思いました。でも災害は防げると思っています。神戸の震災の時、1 人で暮らしているお婆さんをみんなで心配しました。しかしその家は全くといっていいほど何の被害も受けていませんでした。ご主人が海外で大きな地震を経験し、地震に強い家を建てようと徹底的な対策をしていたそうです。対策をしていれば防げるものだと思いました。

災害が発生したら安全な場所に避難しなければならないことはみんな知っています。でもどこが確実に安全な場所なのか知っている人はほとんどおりません。行政や専門家の方よりも地元の方が地域の地形や特徴を知っています。だから自分自身で危険な場所を避けるなど、少しでも知識を身に付けて安全に逃れる可能性を高めることが大切と思います。

〔清水町〕ＩＫさん（男性）

昭和 28 年当時：年齢＝23 歳　　職業＝農業

【被災時】

家は山裾だったので安全でした。だから家は被害には遭っていませんが、田植も終わった後でしたのでその被害は甚大でした。

18 日午前 0 時頃、ものすごい音をたてながら雨が降っており、すでに橋は浸かっていた。当時は今のように天気予報もなかったので、不意に雨が降ってきたような感じで外を見るまで気づかなかった。辺りの普通でない状況を見て初めて危険を感じた。

まず、川沿いに親戚が住んでいたので走って助けに行った。少し上流で川が枝分かれして、民家が中州のようになって孤立していた。そこの住人は家の前からの水を気にしていたら家の裏にも水が流れて来てびっくりした言うことです。その人を助けるため米 1 俵を担いで水の中を歩いたのは本当に大変だった。今も忘れられない。

朝になって外を見ると、川沿いにあった家屋はほとんどが流されて跡形もなく、辺り一面が水に浸かっていた。安全だった家の人は、浸水した家等の手伝いに行った。川の近くの家は流された家も多かったが、私の家の周りでは土砂崩れもなく、流された家はなかった。地区内で人的被害はなかったように思います。

少し上流で山が崩れた。今は植林をしてかなり元の状態には戻ってきているが、今でも崩れた跡は分かる。村内の橋はほとんど流された。

同じ川でも直接水が当たる外カーブは水位が上がり、また別の川から流れ込む水とでその周りは浸水した。避難場所は高台にあった神社と学校だった。

【復興】

川には土砂だけでなく流水やゴミまで流れてきて、それが一面に溢れてきたので、水が引いても外を歩けるような状態ではなかった。

食糧はほとんど流された。その頃 60kg の米を俵に入れておいてあったのを流されないよう運び出したが、結局雨に濡れて食べられなくなった。田畑で作物を作ろうと思っても、田畑の土も流されていたので作物を作れなかった。親戚や近所で食糧を分け合って生活し、何とか生活はできた。他の村から物資を運ぶ時は 20km もの山道を歩いて運んだし、連絡を取るのも歩いて行くしか方法はなかった。

橋も流されていたので対岸との行き来はできなく、水が引いてから架線を張ったり、板などを使って、人がようやく通れるくらいの仮橋を作った。寸断された道はトラック等が通れるようになるまでに 5 年近くはかかったと思う。それでも短く感じたのは、あれだけズタズタに壊れた道路橋が、応急工事ではあったが出来た事がうれしく思ったからです。それでも一番困ったのは交通手段だと思う。

農地の復旧も大変だった。溜まった土砂を取り除いて、もとの田んぼに戻るまでは時間もかかり、本当にしんどかった。床土が流されてなかったので、畦さえ造れば翌年から農作業が何とかできると思い毎日働いたものです。

昔の川はもっと狭くて、今の川の中に田んぼがあるような状態だった。水害以降に川幅が広くなった。

電線も切れてしまっていたので、何日も真暗闇の中での生活が続いた。電気がつくまでかなり時間がかかった。

【花園村天然ダム決壊】

9 月の下旬に突然、有田川に鉄砲水がきた。また村中が浸水した。7 月に被災して、応急工事等で何とか生活を送れると思っていた時だった。応急で作られた家や何とか流れずに残った家ばかりだったので、その鉄砲水でまた流された。7 月の被害よりも大きかったかもしれない。

初めは「何でこんなに水が流れてくるんやろ？」と思って驚いた。後になって花園村にできていた天然ダムが決壊したからだと分かった。

【教訓】

清水町には幹線道路が一本しかないので迂回道路があればいいと思う。土砂や水によって道が寸断されたら、他の場所との連絡がつかなくなるし、物資の運搬もできなくなる。

昔は近所や親戚同士の繋がりが深かったので、困った時でも食糧を分け合ったり避難場所を提供しあったりして、助け合いながら何とか生活を送ることができた。今はそういう関係が薄れて来ているので、困った時にお互い助け合える社会が大切だと思う。

〔清水町〕ＮＴさん（男性）

昭和 28 年当時：年齢＝28 歳　　職業＝材木業

【被災時】

17 日の夕方から、傘もさせないぐらいの大雨が降っていました。

18 日の朝 4 時頃、別棟に住んでいた父親に「危険だから早く避難しなさい」と起こされて、外を見ると腰半分が浸かってしまうまで水がきていました。幼い子どもを抱えて窓から外に出て、斜面を必死に駆け上がり、高台にある家に避難しました。

水が増えてくると馬が必要になると思い、自宅で飼っていた馬を連れ出すため一旦自宅に戻りました。家を出てからほんの数分しか経っていなかったのに、胸の辺りまで水に浸かっていました。

馬を連れて高台に戻ると、私の家が沈んでいくのが見えました。そのうち根が付いて立ったままの木や家が上流から流れてくるのも見えました。

私の家よりも上流の山一帯ほとんどが崩壊しました。その頃の山は、成長していない杉や雑木林が多かったので崩壊しやすかったのだと思います。山が崩壊した時には音がしたかもしれませんが、川や雨の音が大きかったので聞こえませんでした。

家の下流で、川沿いの山が崩壊して川を堰き止めました。そのことと、上流から流れてきた土砂が堆積して河床が上昇し川が氾濫しました。家から数十 m 離れた学校に避難しようとしたけれども、水や土砂に邪魔されて通路がなくなっており、そこすら行くことができないような状態でした。

私が住んでいたほんの近所しか動けませんでしたから、他の場所はどうなっているのか全く分かりませんでした。少しすると隣村から山を越えて避難して来る人がいて、他の地域の様子を聞きました。

2，3 日してから、山奥で暮らしていた人たちの姿が見えないとのことで様子を見に行きました。すると 2 人の兄弟が首まで土砂に埋められた状態になっていました。その 2 人は何とか助け出すことはできたのですが、残りの人たちはみんな亡くなっていました。

【復興】

生活する中で一番困ったことは衣食住でした。着の身着のままで逃げたので、雨に濡れた服の着替えすらなく、近所の人に借りてまかないました。ほとんどの

家で備蓄していた食糧が流されてしまいその確保も大変でした。ヘリコプターから投下してくれたりしたのですが、それでもろくに食べられない状態でした。
一月半ほど親戚の家で生活をして、その後商売に使っていた材木を使って仮設の家を建てて生活しました。

【教訓】
災害から逃げるためには、危機感を持って、常に心構えをしておかなければならないと思います。
当時は情報網も充分に発達していない時代だったので、災害情報どころか天気予報すら知ることができなかった。今はいろいろな情報があって早期避難が可能になり、災害に備えて、最低限必要な物を持って避難できるように普段から準備しておけば良いと思います。
水から逃れるためには山の方に逃げれば良いが、山に逃げれば今度は山が崩壊する恐れがあり、逃げる時は安全な山に逃げなければなりません。同じ山でも尾根に逃げればいいと思います。それ以外の場所だと土石流とか、がけ崩れで災害に巻き込まれる恐れがあります。安全な場所を見極められる知識を身につけておくことが大切だと思います。

〔清水町〕ＵＴさん（男性）

昭和 28 年当時：年齢＝28 歳　　職業＝林業

【被災時】

その年は梅雨が長くて 40 日くらい雨が続いた。18 日の夜明け前、大雨という程ではないが普段よりも多めの雨が降っていた。川は水というより泥が流れているような状態で、どんどん増水してきた。

その頃の川幅は 3～4m で、今よりもかなり狭くて水位が上がりやすかった。普段から夕立が降るとよく床下浸水をしたが、この時の川の様子は普段の雨の時とは全く違った。大量の土砂が流れたことによって、ウナギや魚は息ができなくなって、水の上に浮かんだまま死んでいた。

家の周りにあったいくつかの貯水場の木がどんどん流され、家も流れてきていた。近くの山が崩れた時は雷が鳴るような音がした。何人かの人が土砂の下敷きになって今も見つかっていない。

家の中に木材を運んで、その重みで家が流れないようにしていたが、家財道具は次々と流されていった。ただそれをじっと見ているだけで何もできなかった。

家も田畑も流されてしまって、残ったのは寺と学校だけだった。

【避難】

普段から雨が降ると高い所に避難をしていたので、その日もいつもどおり混乱することはなかった。しかし、川向こうの寺や学校に行こうとしても橋が流されていたり、崩れた土砂が邪魔になって目の前に見えている場所にすら行くことができなかった。

【復興】

家の復旧には、トタンなどを使って少しずつ作業をしていた。

安全にもとの生活に戻るまでには数年かかった。

【教訓】

川の増水は水より土砂が原因と思う。土砂が流れてきて河床を上昇させたり、崩れた土砂が川を堰き止め、増水して氾濫した。逃げるとき、水の中なら泳いでどうにかなるが、土砂が混ざっていると体が重く、動きづらく逃げるのが難しい。

山道を知っておくと避難する時に役に立つ。村では毎年夏になると「山道狩り」と言って山道を歩く行事があり、そのおかげで山の中でも素早く避難できた。

多くの対策が行われいる中で、一番の災害の原因は「自分は大丈夫」とか「まだ大丈夫」という油断だと思う。

昔は情報網は発達していない時代だったので、雨の予測も全くできず、危険が迫るまで危険を知ることはできなかった。今は情報が発達しているので、正確な情報をもとに素早い行動をすれば災害を妨げると思う。

普段から「災害はいつ自分の身に起こるかも知れない」という危機感を持って、少しでも危険を感じたら早く避難できるように、日頃から心の準備をしておかないといけない。

「災害は忘れた頃にやってくるもの」と言われているが、そのとおりだと思う。

〔金屋町〕ＨＴさん（男性）

昭和 28 年当時：年齢＝26 歳　　職業＝林業

【被災時】

水害前の私達の集落には 55 軒が住み、主に林業（炭焼き、椎茸栽培）中心で生活していた。

梅雨末期になり、10 日近く雨降りが続き、17 日夕方より一段と雨が激しく降り出した。「明日もこの分だと仕事ができない」と思い、友達の家で遊んで泊っていると、18 日午前 4 時頃、おじさんに「川の水が増えて自家発電所が流される」と起こされ、早速家に帰ると、水位が家の近くまで上がっていたので危険だと思い家族とともに近所の家に避難した。ますます水位が上がり発電所が流されて電気が消えた。各所で山つえ（山崩れ）が起こったのか、土石流が起こって、各家が浮いて流れ始めた。避難した家も流されそうになったので、裏のお宮様に逃げた。この時には集落の半分が流されていた。2 日間で学校やお寺も流されて、残った家はわずかに 7 軒だった。

2 日目の夕方になって、集落上流 3km の所で林道の工事にきていた建設業の方々が飯場生活をされていたが、何の連絡もないので、当時林道建設委員長だった A さんに話をして、明朝、夜が明けるのを待って現場に行くことにした。
土石流で川の流れが急なので、裏山から尾根つたいに現場に行き、着いてみると、飯場は全部流されて誰もなく、全員が流されたと思い、A さんと 2 人で川に沿って下ることにした。

午後 4 時頃、孤立した場所に人影を見つけ、水位が高いので、お互いにロープで体を縛って、水に流されながら向こう岸に渡った。女性 1 人男性 2 人がいて、2 人の方が飯場と共に流されて不明になっていた。泣き崩れる 3 人の方々を励まし、一刻も早く集落まで連れ帰ろうとしたが、3 日も食事をしていないので途中歩けなくなり、仕方なく山中に残して食べ物を取りに帰り、再び山に入って連れて帰ったのが翌朝 8 時頃だった。

【被災後】

10 日余り降り続いた雨もようやくあがり、日がさすようになり、私達の住んでいた土地も田も畑も全部が川底になってしまった。おそらく 20m は上がっていると思う。流れ残った家の備蓄米を分けて、その他の食糧は一山超えた岩野河の B さんの家でお世話になり、村からも救援物が運び込まれるようになったので、区民が一つになって道路の復旧に取りかかった。

ようやく水害から立ち上がろうとしていたところ、9 月 15 日の 15 号台風でまたも大きな被害が出て、この台風を境に集落から 30 軒の方が故郷を出て行くことになった。

残った私達は村・県・国の支援のもとに復旧に取りかかった。50 年たった今、荒れ果てた山も土地も道路も立派に復旧し、2 人の犠牲者が出た白馬林道も出来上がり、あと 2 年ぐらいで舗装した道が完成する。県道も国道 424 号線に昇格して頂き、1 日千台もの車が通るようになり、水害当時、陸の狐島とされたことを思うとうれしいかぎりであるが、50 年前の水害時には、若い者が何十人もいて復旧に全力を尽くしたのに、現在では 1 人もいなくなっているのが一番寂しいかぎりである。

【教訓】

災害が起こった原因は雨量等色々あると思うが、戦争中から山を乱伐してきたのが一番大きいと思う。これからは山を守り木を育て行くことが大切だと思う。後継者がいない現在、私達がその方面に力を入れて、故郷を守り続けることが大切だと思う。

（２）日高川流域の方の体験記

〔龍神村〕ＯＮさん（男性）

昭和 28 年当時：年齢＝31 歳　　職業＝森林組合職員

【被災時】

17 日から前が見えない程の豪雨で、18 日の朝 4 時頃がピークだったと思う。17 日にバスに乗って御坊に行った時、バスの中で雨漏りがしていた。

川には根のついたままの木が流れて、ぎっしりと並んで流れて、それらが橋に勢いよく重なってあたって、見る間に橋は切れてしまった。最終的に村内に残った橋は 2 カ所だけだったが、山は至る所崩壊して、遠くから見ると猫がひっかいた爪跡のように見えた。

【避難】

川に近い住民は、以前から大雨のとき、よく床下浸水をしていたので避難には慣れており、その時も 17 日の明け方から家財道具などまとめて避難を始めていた。でも普段と違って浸水の速度が速く、驚くほど水位が上がって、途中庭先では、大人の肩の辺りまで水に浸かって大変だったが、普段の経験から準備を急いでいたので、特に混乱もなく避難することができた。経験もなく不意のことであったら避難はできていなかったかもしれない。おかげで近所での人的被害はなかった。

【前兆現象】

山が崩壊する前には小石がパラパラ落ちていたであろうし、海鳴りのようなゴーという不気味な音もしていたと思うが、怖さのあまり震え上がっていたので確かな記憶ではない。

【被災後】

とても復興できるとは思えないほど荒れていた。家の近所では流された家はなかったが、ほとんどの家は壁土や床板が流されて、あばら家のようであった。農地は 2, 3m くらいの高さまで土砂に埋まり、土地の境界がなくなり、自分の土地か他人の土地かも分からなかった。道路と川の区別もつかなかった。

食糧を確保するのが大変だった。道路が寸断されていたので山道をたどって食糧をもらいに行った。スキー場のリフトのように川の上にロープを張って物

を運んだ。ヘリコプターから物資を投下してくれることもあったので、特に食べるものに困ることはなかった。

10 日ほど避難生活を送って、その後は個人で工夫しながら自分の家で生活をした。崩れた壁に土を塗ったり農地の土砂を取り除いたり、復旧は自分たちの手でやった。土砂の中から家で使っていた鍋やいろんな物が出てきた。井戸も埋まっていたので風呂水は川から運んだ。

一番困ったことは灯りだった。電線が寸断されていたのでロウソクの灯りで過ごした。みんながロウソクを使うので村だけでなく田辺の店でもロウソクが売り切れた。

道路に車が通れるようになるまでに 3 年くらいかかったように思う。和歌山市に行く時は交通手段がなかったので、田辺や御坊まで歩いて、そこから漁船で下津まで行った。海は川から流れ込んだ土砂で赤く濁り、たくさんの木が浜辺を埋めていた。

【教訓】

災害後に 2 階建ての家を新築した。大事な家具類は 2 階に置くこともできるし、2 階に上がれば水や土砂から逃げることができると考えたからです。

当時は、戦争経験者が多かったので、生きるために山に行って食べられそうな草や木を採って知恵を使い工夫して生活した。今の災害を経験したことのない人たちは、何もかもなくなってしまったら対応できないかもしれない。

〔美山村〕ＩＩさん（男性）

昭和 28 年当時：年齢＝19 歳　　職業＝農業

【被災時】

当時の新聞等では、花園、有田が大変だということでしたが、それは交通の便がいいということで、報道関係がそちらを主にしたんです。この辺りの被害はもっと大変だった。

私の家は日高川から離れた高台だったが、日高川沿いの惨状は直接目の当たりにはしていなかった。前が見えないぐらいの雨が降って白いカーテンごしに前を見ているようだった。まるで白い雨が滝のように降っているようでした。

日高川沿いは上流から流れてくる土砂によって河床が上がって氾濫したり、渓流での土砂崩壊による被害がほとんどでした。そのうちの一つが弥谷の山津波による被害でした。今見ると「こんな小さな谷が？」と思うような場所でも土石流が発生した。

天然ダムもできていたらしく、決壊した時は下流の家が流された。家が流される時は、軒下まで水がくると家が浮き始めたと聞いている。橋が流れた時はワイヤーが切れて、ものすごい閃光が走った。

当時は電話などの連絡手段が充分でなく正確な情報を聞けなかった。御坊の警察署長さんが巡回に出たまま一時行方不明になったほどの状態だったと聞いている。雨が止んだ後に村の様子を見てびっくりした。

【被災後】

高台にあった家は何とか残ったが、大半の集落は日高川の水と裏山の崩壊による土砂によって流された。田畑には土砂が堆積してヘドロのようなものがずっと続いていた。

土砂に埋もれた人を掘り起こすのも、みんな被害を受けていたのでかなり時間がかかった。一週間くらい土砂の下敷きになり助けられた人もいたし、赤ちゃんの時に生き埋めになって助けられたと言う人が村にはいる。

橋は全滅だったので、対岸とは矢文で連絡をとった。学校は他の村へ分散して授業をした。

記憶に残っているのは、18 日の災害のあともジメジメと雨が長く続いて、かろうじて外に出した米俵の籾が濡れて発芽して食べられなくなったことです。被災後は食糧の確保が問題になり、最初は山を越えて蟻輸送で行った。

個人的には農地が壊滅したので百姓を止めた。

【教訓】

前から迫ってくるものは防げるが、後ろから迫ってくるものは防げない。川の増水のようにだんだんと目に見えて迫ってくるものは、ある程度危険を予測して早めに避難や対策ができるけれども、土砂のように突然一瞬にして起こるものは、逃げたりするのは難しい。

【村長として今後の災害対策】

今は地震対策に力を入れています。土砂災害の危険箇所に砂防ダムや擁壁等を作る工事は、やはり大切です。

現在は携帯電話やたくさんの便利な物が普及してきているので、被災生活も昔ほど困ることはないかもしれません。無線や放送などで村民に情報を知らせるようにしています。しかし大勢がパニックになって携帯電話を使うと回線がパンクしたり、アンテナが倒れたりすると何の役にも立ちません。電線が切れると電気に頼っている器具は使えなくなり、別の問題が出てくるはずです。そうならないための対策を考えておかなければなりません。

避難場所についても、学校を住民に提供すると子供達の授業の邪魔になります。また村内の高齢化率は非常に高く、高齢者の避難の問題もあります。災害が起これば、まず高齢者を安全な場所に避難させることが鉄則だと思います。

〔美山村〕ＫＳさん（男性）

昭和 28 年当時：年齢＝37 歳　　職業＝川上村議会議員

【被災時】

そりゃあ、もう鮮明に覚えています。あの時は雷が鳴ってかなりの雨が降りました。当時、私は川上村の村議会議員をしていました。

18 日の夜明け前、隣の人に起こされて行ってみると、家の裏山からどんどん水が流れ出てどうしようもない状態で、私の家に荷物を運び入れた後、子供も小さいので、家内に「『俺が逃げよ！』と言うまで家におれ」と言って上流の方の人に応援を求めに行った。しかし、上も水でえらい騒ぎになっていたのでとても応援を頼めなかった。

いよいよ水が迫ってきたので、家内に「子どもを連れて上の家に上がれ」と言った。おそらく 7 時頃だったと思う。隣人が避難したかを確認して、まだ避難していない人がいたので、そこの子供を背負って上まで連れてきた。上の家に避難してもどんどん水は迫ってくるし、みんな不安になって集落の一番上の家に避難した。

避難した家には何人かの年寄りと子供の病人がいた。病人と老人が雨の中を移動するのは大変だと思って、無理に「ここから出よ」と言えなかった。ちょうど若者 3 人と外で農家の米を出そうと相談しているとき、その家の裏で山崩れが起きて、一瞬に舞い上がった赤土で前が見えなくなった。今まで避難していた 2 階建ての家の中にいた病人と年寄り 12～13 人が、土砂崩れで家の下敷きとなった。この頃、私の自宅が流失したのが分かったが何の感慨もなかった。

【被災後】

19 日に若者 12～13 人を招集して土砂と家の下敷きになっている人の掘り起こしにかかった。事故後すでに 24 時間経過していた。次々と死体が発見されたので、水をかけ、確認しながら処置する中、子供が一人生存しているのを発見した。早速抱き上げて、荒れた道を出水の流れている中 20 分くらい走って病院に連れて行った。必死になって運んだのでどうやって運んだか記憶にない。診察処置をしてもらい、比較的元気であったので連れ戻った。その子の母親や家族は全員遭難していた。父親だけが都会で単身赴任していた。その後、父親が帰るまで私の家族と避難先にいた。

若者達の大変な協力を得て 13 人を葬ったが、棺桶もなく流れてきたタンスの板を使って棺桶を作ったりした。

最後に大きな牛が土砂に埋まって死んでいたが、処置出来ず仕方なく川に運んだ。役場と連絡がとれなくなって、村長もどこに行ったのか分からないような状態だった。

備蓄していた食糧が流されたので食糧の確保に困った。まず、流れずに残った手持ちの食糧を確認した。みんなで分けても何とか 1 週間ぐらいは持ちそうなぐらいはあった。

他の地区から食糧を求めてやってきたので、集落の若者 10 人くらい集めて山道を歩いて御坊まで行った。当時の県事務所にお願いして、1 人 2 斗を担いで戻ってきた。そして実際に困っている人に配給した。そのうちヘリコプターで投下してくれるようになった。

ようやく村が動き始めて、集落ごと交代で食糧を運んだり作業をするようになった。橋がなくなっていたので、対岸と連絡を取るのに大声で叫んでも川の音に邪魔されて、全然違う内容が伝わってしまったことがあった。

【教訓】

災害に遭うと人間の本性が表れると思った。十分な食糧がなくて空腹になると、人間はいら立ちを隠せなくなって、他人を思いやる気持ちがなくなってしまう。苦しい時こそ助け合わなければならないのに。冷静な気持ちを維持するためにも食糧は大切でした。

あとは家族は離れて暮らすものではないと思った。主人が出稼ぎに出ていた家族は被害に遭った。主人がいないとやはり指示をする者や家族を守る者がいなくなるからだと思う。

教訓ではないけれど後悔していることがあります。年寄りと子供と病人に、雨の中危険を予想できた場所からの避難を強制できなかったためみんな亡くなったこと。そのことがずっと自分を痛めつけて自己反省している。

【災害対策】

食糧備蓄と連絡手段の確保をしてほしい。食糧備蓄は 1 箇所だと道路が寸断されて食糧を運搬できない場所も出てくるかもしれないので、道路が寸断されて孤立する恐れのあるところには何箇所かに分けて備蓄しておく必要がある。

また電線が切れると連絡が取れなくなる可能性もあり、その時のための連絡手段も考えておく必要があると思う。

『喉もと過ぎれば熱さ忘れる』という諺がある。災害発生直後はみんな対策に積極的になり、用地交渉等もスムーズに進むが、時間が経つにつれて消極的になりなかなか事業が進まなくなる。『災害は忘れたころにやってくる』常に危機感を持っておかなければならない。

〔美山村〕NMさん（男性）

昭和28年当時：年齢＝19歳　　職業＝筏師

【被災時】

当時、筏師をしていて、作った筏や作りかけの筏を日高川に繋いでいました。

17日は朝から雨が降っていた。夕方になって川の水が増えてきたので、筏が流れないように上流の安全な場所に繋ぎに行った。普段筏を止めているロープよりもっと太いものを何本も使って止め、安心して家に帰ってそのまま眠った。

父親が夜も眠れずに戸をちょっと開けて雨の様子を見ていた。私も外を見たら雨が地面に跳ね返って、上向きに上がれるくらいだった。

18日の朝、雨がどんどん降ってきて、4時半過ぎでもう明るかったので、近所の筏師を集めて筏の様子を見に行った。日高川まで行くと筏や材木がどんどん流れて、材木の上を歩いて向こう岸まで渡って行けそうなぐらいだった。昨日繋いだ筏の様子を見に行ったが、途中の大きな橋が流されていた。筏よりも自分の家が危ないと思い引き返し、集落を見ると一番川に近い家が浮き始め、日高川の水が海の津波のように溢れてきた。慌てて高い所に逃げたが、父親は5分ほど引き返すのが遅かっただけでお昼まで帰って来れなくなった。

何とか家の近くまで戻って来ると、我が家より少し低い位置の家の前まで水が上がり始めていた。母親は仏壇に向かって手を合わせていた。そのうち我が家もだんだん水が上がって来て、母親は預かっていた幼い姪を負ぶって、石垣にしがみつきながら姪の親のところまで連れて行った。それから15～30分ほどの間に天井まで水がきた。辺り一面が海か何か分からないようなほど濁流に包まれて、神社の石段8段まで浸かった。

川向かいの家が全部流れるのが見え、プカーと浮いて10mほど行くと沈んだ。一番最後まで真っ白い壁の郵便局が持ちこたえていたが流れた。前の家は屋根まで浸かってしまったが、瓦屋根の重みで流されずにすんだ。しかし瓦は落ちてしまい壁土も落ちてしまい、建てかけのような状態になった。

近くの夫婦が避難しようとしたが、忘れ物を取りに家に戻った。その時、水が増えて動けなくなって、庭の木のてっぺんに這い上がって助けを求めていた。2，3時間後に助けられた。

近くの弥谷で土砂の下敷きになって86人が犠牲になった。現場の様子を見に行った4人も同じように巻き添いなって亡くなった。

【被災後】

水が引いた後の田畑は、泥や木でいっぱいになっていたので土地の区別がなくなっていた。タンスの中にも泥が入っていて、通帳などの貴重品も泥だらけになっていた。橋が流されて対岸との連絡は弓に紙をつけて放った。

復興には 4，5 年かかった。

【教訓】

自然の力は人間の力では食い止められないと感じた。茅葺き等の軽い屋根の家より瓦屋根の方が瓦の重みで流れにくい。早く避難したかそうでなかったかで、助かったか助からなかったかが変わる。あの時は水が増えてきたのが昼間だったから良かったが、夜だともっと被害者が出ていたと思う。水が増えてきたら早めに逃げることが大切。

〔中津村〕ＨＪさん（男性）

昭和 28 年当時：年齢＝31 歳　職業＝川中村（現･中津村）職員

【被災時】

当時は役場職員をしていたので、とても忙しくてほとんど家に戻らなかった。毎日、日記をつけていたけれど、忙しさのあまり書いていない日もあるし、詳しく記録していない。災害の大きさと大変さを改めて感じます。昭和28年災害は、人生で最大で最悪の災害でした。

17 日から雨が降って夜中の 2 時頃から豪雨が降り始めた。4 時頃に外を見ると屋敷は水浸しで母屋と離れの間にも水が流れていた。6 時頃、日高川が増水して護岸を越え、対岸の役場に行こうとしたが、車が通れる程の大きな橋も水に浸かって渡ることができなかった。

9 時か 10 時頃、雨はほとんど止んだが対岸の住宅 6 戸が流れた。日高川の上流から、根の付いた木や材木がたくさん流れてきて、それが橋に当たって橋が切れた。橋が切れる時には火を噴いた。

最後に家が流されたのは 11 時頃だった。家が流れる時は、屋根の下の辺りまで浸水して、始めはそのままの形で流されだんだんと形が崩れていった。

対岸の日高川支流で、面積にすると 200 平方メートル程の山が崩れて天然ダムができた。後にその天然ダムは決壊して大量の水が流れたが民家のない場所だったので被害はなかった。その他にも至る所で山の崩壊が発生した。山は突然崩れ、村の耕地ほとんどは流失し埋没した。

被害は水よりも土砂や流木によるものが多かった。

【被災後】

対岸へはずっと下流の唯一残った橋を通ったが、村内の活動は日高川の右岸と左岸に分かれ、川岸で手旗信号を使ったりして連絡を取り合った。水が引いてからは渡し船で対岸との行き来をした。

22 日、役場の同僚と 2 人で道なき道を歩いて御坊まで下って、災害報告を行うと同時に、米 50 俵などの食糧やその他の救援物資をもらって戻ってきた。これらの物資の搬送は、村民総動員して、人肩により徒歩で村まで蟻輸送を行って運んだのである。

道路や農地が復旧するまでは 7，8 年かかったように思う。その間、農作業ができなかったため食糧は配給で確保した。

【教訓】

水害はだんだんと水が迫ってくるので、ある程度予測でき事前に避難することは可能。しかし、土砂災害は突然起こるので発生寸前に避難するのは難しい。

災害はいつ起こるかわからないという心構えを普段からしておくことが大切だと思う。

日記による災害報告

昭和 28 年 7 月 21 日　　川中村被害　中間報告
床上浸水＝80 戸　床下浸水=270 戸　半壊＝20 戸　流失＝36 戸
流失による被害者＝180 人　死者＝2 人　行方不明＝2 人
人的被害＝400 人　田畑の冠水や流失＝ほとんど
道路損壊（原因ほとんど土砂）　県道＝6 カ所　町道＝12 カ所
林道＝4 カ所
土砂崩れにより直接つぶされた家屋（全てが山の谷間の家）＝4，5 軒

〔中津村〕ＳＫさん

昭和 28 年当時：年齢＝28 歳　　職業＝農協職員

【被災時】

当時は役場と農協が同じ場所にあり 17 日の夜は役場で宿直をしていました。昭和 28 年の災害のことは非常に印象に残っています。

17 日の夜中から明け方にかけて滝のような雨が降っていた。18 日の朝 6 時頃、目が覚めて外を見ると日高川が増水しており、役場に次々と被害情報が入ってきて、職員も出勤してき始めた。役場は少し高台にありまだ浸水はしていなかった。

2 時間程の間に、見る見るうちに水が増えて、農協の売店の入口が外からの水の勢いでガタガタし始めたので、釘を打つなどして応急措置をとった。それでも水は建物の中に入ってきて、農協の商品は浮かび始めた。8 時頃には雨は止んでいたが、川は夜中の集中豪雨と土砂が混ざったことで一気に増水した。

役場の 2 階から自宅を見ると田畑が水に浸かり自宅に水が迫っていた。家に帰ろうとしたが、途中の橋が水に浸かり渡ることができなかった。

川を見ると上流から流れてきた材木と日高川本流から逆流してきた材木が、絨毯を敷いたようにぎっしりと浮かんでいた。材木の上を上を通って渡ろうと考え、材木に足をかけると材木が沈み渡ることを諦めた。次に泳いで渡ろうと考えたが、水の勢いで本流に押し流されてしまうと絶対に助からないと思い、少しぐらい押し流されてもいいように上流の流れが緩やかで川幅の狭い所を選んだ。川に飛び込むと水というより泥だった。真水と違って泥水は体が重くてだんだんと沈んだ。その中を必死になって泳いでようやく家にたどり着いた。家に戻ってもただ呆然としているだけで何もできなかった。

【被災後】

川沿いの田畑や学校のグラウンドは砂浜のようになり、中学校の石垣も流された。川沿いの家は流されたり家の中に土砂が入ったりしていた。被害は水よりも土砂によるものの方が多かった。土砂に埋もれて未だに見つかっていない遺体もある。

食糧が流され他の村から運ぼうと思っても、道が通れなくなっていたので運搬も困難だった。農協には備蓄していた食糧はあったが、いつ食糧が運ばれてくるか分からなかったので簡単にどんどん売るのではなく、必要な分だけを少し

ずつみんなに行き渡るように大切に売った。必要最低限は確保できたので特に空腹で困ったということはなかった。

当時は炭作りや薪商売等の山仕事で生活をしている人が多く、山が崩れたことで収入減がなくなった家もあった。村内はほとんどの農地が壊滅状態で、完全に復旧するまでに 10 年くらいかかった。

【教訓】

川の増水はジリジリと迫ってくるので事前に避難することは可能だけれど、土砂は突然一気に崩れるので事前の避難が難しい。

私はあの時必死だったので無我夢中で川に飛び込んで泳いだけれど、今になって冷静に考えるととても恐ろしく、みんなに驚かれます。あんな危険なことをするものではないと思います。

思わぬ時に災害はやってくるので、日頃から天気予報等の情報を聞いて事前に対応をしておくことが大切だと思う。

（３）貴志川流域の方の体験記

〔美里町〕ＡＫさん（男性）

昭和 28 年当時：年齢＝21 歳　職業＝上神野村（現･美里町）職員

【被災時】

その頃は上神野村役場の職員は全部で 8 人位しかない時代だった。

17 日の夜、神野市場の祭で、学校からの帰り少し休憩し帰った。時計を見ていなかったが 9 時頃雨はポロポロ降っていた。傘もいらないくらいの大した大雨でなかった。

朝、ものすごい雨で目が覚めて、外を見たら貴志川が氾濫していた。川沿いに 2 軒の家が流されそうになっていたので、父親が上流の家、私は下流の家に手伝いに行った。辺りはほんのり明るく、夏だったので 4 時頃だったと思う。

どんどん水が増えてきて、8 時頃だったか明るくなってから下の家は流れた。上の家はそれより早く流れていた。上と下の家の間では連絡がとれないような状態だったので、上の家が流れた正確な時間は分からない。下の家が流されるのは目の前で、大きな家の屋根が沈んで行くように流れてしまった。その時、納屋の肥料を出したのが精一杯で、あとは呆然と見ていることしかできなかった。他の人もみんなそうだった。流れた 2 軒の家は、石垣を積んだ敷地の上に家を建てていたので、敷地が流されることによって一緒に流された。

家に戻ろうとしたら幅 1m くらいの谷が氾濫して戻れなかった。谷の上流にある町道を通って帰ろうと山を登り、急斜面のシュロの木を捕まえて上がった。地面が水を含みブヨブヨになって捕まえた木が抜けて倒れた。何とか這い上がって町道まで辿り着いたが、ズボンはビリビリに破れて膝からは血が出ていた。その後、下を見ると登ってきたシュロ山が 50m ぐらいの幅でそのまま土煙をあげてドドドッと滑って行った。もう少し登るのが遅かったら巻き込まれていた。今思い出しても恐ろしい。

家に戻って 9 時か 10 時頃になっていたと思う。家は急斜面に建っていたので、大量の雨水が斜面の上から土砂を含んで走るように流れていた。それが牛小屋に入って小屋がつぶれ、牛が土砂に埋まってもがいていた。

近くの谷が氾濫して一軒の家が流されて、お爺さんと孫さんも流されたが、孫さんは木に捕まって助けられた。その他のことは自分の事で精一杯で、他の家がどうだったかなどということは覚えていない。

【被災後】

子供の頃は狭い川で大きな岩もあり、のどかな渓谷だったが、その水害で川の様相が変わってしまった。川沿いの玉石や農地などは流されて、下から自然石が現れた。明くる日そこにヘリコプターが着陸したほどだった。河床も上がった。淀みと瀬の区別もなくなって砂利の川になった。川も農地も一体になってしまった。

美里町内の橋は全部流れ、1本しかない幹線道路は寸断されてしまい、通勤通学の自転車も通れず歩いて行くしかなかった。他の地区から見舞いに来る人もみんな歩いて来ていた。少しずつ道が良くなってから自転車で通うようになり、所々寸断されている所では自転車を担いで歩いていた。

食糧は自給自足が主だったし、備蓄していた食糧もほとんどの家が流されなかったので特に困ったことはなかったが、その頃は避難場所提供等の体制ができていなかったので、被災した人は親戚の家や流れずに残った部屋で生活をした。トイレも流されていたし、伝染病等の衛生面の問題があった。

【教訓】

水が増え始めると早いし、一旦水が増えてしまうと動きようがない。今は天気予報などの情報があるので、危険と感じたら素早く行動することだと思う。一瞬の違いで生死を分ける。

あんな災害が来たら今でもどうしようもないと思う。自然の力を人間が押さえるのは不可能だと思う。

〔美里町〕MYさん（男性）

昭和 28 年当時：年齢＝34 歳　　職業＝鉄道会社勤務

【被災時】

災害のときは新宮・白浜方面に出張中だった。17 日は新宮から白浜に移動して一泊した。その日は朝はショボショボの雨で、夕方から少しずつ強くなって夜中には大雨になった。

18 日の朝、前が見えないほどの豪雨だったが、風は全然吹いていなかった。電車は運休し、道路も寸断され交通手段はなく、仕方がなくその日は 1 日かけて田辺まで歩き、そこで足止めされた。

21 日になってようやく自衛隊の船が海路で足止めされた 70～80 人を和歌山市まで運んでくれた。村に戻ったのは夜中だった。

【村に戻った時】

村は終戦になったときの焼け野原と同じような状況で度肝を抜かれた。どこから手をつけていいのやら分からなかった。聞いた話によると、バケツの水をひっくり返したような雨が降って樋が溢れていたらしい。

1 本の橋を残しただけで、それ以外の美里町内の橋は全部流された。その橋は貴志川と真国川の合流地点で水が渦を巻くような流れ方をして流されなかった。

一週間位してから両岸にロープを渡して、籠を吊って対岸と行き来をした。丸太を橋の代わりにもし、仮橋ができたのは一ヶ月くらい後であった。

川沿いの農地は高い所で 3m くらい、平均しても 1.5mくらいの土砂が溜まっていた。河川沿いの谷川は、河床が上がったことで水位が上がり決壊した。5 反のうち 3，4 反は土砂が堆積して護岸も決壊して作物が作れなくなった。その内 1 反ほどの畑は水田に切り替えた。

食糧等に困ったという印象はないが、山の奥では自衛隊が食糧を運んだようだ。この辺りまで道があったので自衛隊のジープが来て奥に歩いて運んだ。この辺りでは土砂崩れで亡くなった人はいないが、田畑の復旧作業をしていて土砂の中から人や牛が出てきたことがあったらしい。

当時は戦後数年しか経っていなかったし、電話もないし、電気もろくになような生活だったので、さほど不自由を感じなかった。被害金額は当時の金額で 9 億か 10 億くらいだった。今の金額に直すととてつもない金額になる。

【教訓】

当時は戦後復興に必要な材木を確保するために山の木が伐採されていた。そのため村内の至る所が裸山になって崩壊しやすかった。地中に木の根が張っていればその分だけでも根が雨水を吸収してくれる。緑は大切だと思った。

今は普段から貴重品や懐中電灯などを袋に入れて、いつでも逃げられるような準備をしている。

（４）熊野川流域の方の体験記

〔本宮町〕OMさん

昭和 28 年当時：年齢＝27 歳　　職業＝本宮郵便局勤務

【被災時】

災害の当日も前日も少し強いくらいの雨で大雨ではなかった。18 日、まだ出勤時間でなかったので朝 6 時か 7 時頃だったと思う。「川の水が増えてきたのですぐに局に来てほしい」という連絡があった。

当時の郵便局は道路より 2m くらい下にあった。道路を支えている石垣が郵便局から見ると壁のようになっていて、その石垣からものすごい水が滝のように吹き出ていた。局舎は 2 階建てだったので、1 階にあった書類等を 2 階に運んだ。2 階に運び終わると同時に 2 階も水に浸かってしまった。それぐらい水位が上がるのが早かった。仕方なく最も重要な物だけを持って高台に逃げた。

高台に逃げるまでに堤防が切れた。当時は水上交通として筏を使っていたので、川に繋いであった筏や上流から流れてくる材木が陸地に流れ込んできた。それが旧社地（旧･本宮大社）の森の小口にひっかかり、その材木に沿って川のように水が流れた。

その流れのなか取り残された人がいた。水は私の胸くらいだった。私や他の若い者が、取り残されたお年寄り達の手を引いて助け出した。その時の水は泥が混ざっていて、またお年寄りの手を引いていたこともあり、思うように前に進めなかった。だんだんと危険が増したため、一人の局員が家にあった船で残った人を運んだ。

当時の家は基礎工事をきちんとしていなくて石の上に柱が乗っているような状態だった。一軒の家が流されると、その家が別の家に当たって一緒に流れていくといった玉突き状態で、どんどん流れていった。

熊野川の水位＝9.67m　　町内流出＝160 戸

【被災後】

農地は土砂が貯まって川原のようになった。本宮町の農地は川沿いに集まっていてほとんどが畑だった。それらの畑は水害以降田んぼになった。

旧社地よりも下流の家はほとんど流れなかった。とは言っても家の中の物は流されたり、土砂がたまったり、柱だけになっていたり、とても生活していける状態ではなかった。幸いにも役場や学校等の公共施設は高台にあり、被災者は応急住宅ができるまでは学校に集まって生活をした。

高台に住んでいた私たちは特に困ったことはなかった。道路は田辺－本宮間は通じていたが、日用生活物資は、ほとんど熊野川の水上交通で新宮から運ばれ

ていた。水害直後の何日間は川の水位が高く船は通れなかったが、その後の生活を含めても特に空腹等で困るということはなかった。

【教訓】

雨が降るのは防ぎようがない。問題は堤防が切れたために被害が大きくなった。だから災害対策工事をきちんとしておけば災害は防げる。今の人は大災害を経験していないので、日頃から訓練しておくことが大切だと思います。「こんなときはこうすればいい」というような判断ができることが大切です。知識として、岩盤の川は土で形成された川と違って水を吸い込まない。その分水が増えて流が速くなる。

〔熊野川町〕ＳＴさん（男性）

昭和 28 年当時：年齢＝28 歳　職業＝三津ノ村（現･熊野川町）職員

【被災時】

7 月 18 日、災害救助法が発令されていた。

いつものようにバスで役場に出勤した。降りた所は赤木川下流の神丸相須で、熊野川の水が逆流していた。その時はほとんど雨も降っていなかったので「変だねぇ」とみんな言っていた。しかし逆流してくる水がだんだん増えてものすごい災害になった。

出勤して初めて事情を知った。前日上流の奈良県十津川村で 700mm を超える雨が降り熊野川の水位が上がり、そのため赤木川が逆流し木や土が流されて濁流となっていた。増水がもし夜中だと、もっと大きな災害になったと思う。

【被災後】

当時は橋がなく対岸へは渡し船で行き来をしていたので、川が増水すると 1 週間も 10 日も対岸と連絡がとれなくなりました。

整備の整った道路はなかったので災害で寸断されて生活に困ったという記憶はないです。その頃は水上交通が盛んで新宮から熊野川をプロペラ船が村まで上がっていた。食糧もプロペラ船で運んでいたので、災害後も特に物がなくて困ったということはなかった。川から重い物資を担いで毎日のように上の家に運んだことは忘れられない。一番困ったことは田畑一面 60cm～1m くらい溜まった土砂の排除だった。復旧しても復旧しても次々と災害が襲ってきて、完全に復旧するまでに 7，8 年かかったと思う。

被災した人に「置いてあった物がなくなった」と言われるのが辛かった。農地や家屋被害を受けた人たちの心に余裕がなくなったからかもしれない。

【災害対策】

家の周りは山に囲まれ携帯電話のアンテナがなく電波の届かないところが沢山ある。災害時の緊急連絡を考えるとアンテナ設置が必要だと思います。

その他に 28 年災害の応急工事が今もそのままになっています。弱っている所など修復してほしい。昔のままだと災害が起こったとき防げないかもしれないし怖い。

【教訓】

仕事上で訓練されていたことが大きい。一度目の災害より二度目の災害の方がてきぱきと行動できた。情報を重視しないといけないと思う。今は天気予報やニュースがあるのでその情報を早く聞いて早く逃げ行動することが大切。熊野川町民の多くは事前に避難している。危険な時は自主避難が必要。

〔熊野川町〕ＴＭさん（男性）

昭和 28 年当時：年齢＝27 歳　　職業＝敷屋村（現･熊野川町）職員

【被災時】

17 日の夜役場で宿直していた。次の日に災害が起こるとは思ってもなかったし、雨も少し降っていただけだった。

18 日の午前 7 時頃、雨が強いので起きると、田んぼの稲穂の先まで水に浸かっていた。「これは大変なことだ」と思って外に出ると、役場の下の道路が浸かっていて、4，5 分すると 7，8 段の階段が半分浸かっていた。熊野川は材木で一杯だった。

当時、熊野川左岸に診療所を建築中で、その材料を近所の人が流されないように高い所に運ぶ作業をしていた、私もカッパを着てその現場に行った。道路が水に浸かって通れなくなっていたので、診療所から 50m ほど下流の寺の庭を通って行った記憶がある。現場に到着した頃には資材が流され、当時の村長が資材の運搬作業をしていた。

役場を見ると人の腰くらいまで浸かっていた。20 分もしないうちに屋根が少しだけ見えているような状態まですっぽり浸かった。その頃の役場は 1 階建で熊野川左岸に建っていた。結局役場には戻ることができず、夕方 7 時頃渡し船で自宅に戻った。

川が急に増水したのは、上流の十津川村にできた天然ダムが決壊したためだった。

普段から川の増水には慣れていたし、避難のための制度などもなかったので低い土地に住む人は自分で判断して避難をした。

【被災後】

水が引いた後は走路や農地に土砂が 80cm～1m くらい堆積し、歩けないような状態だった。電話もない時代だったので、村内の情報すら入らず情報収集に動き回った。しかも。その頃は役場の職員数も 7，8 人だったので災害状況の調査をするだけでも大変だった。状況を調査して県に報告する仕事だけで毎日夜中 3 時頃まで働いた。今では言葉では言えないような惨状だった。幸いにも敷屋村では人的被害はなかった。

1 年後に農地の復旧をしていると土砂の中からミイラのようになった死体が出てきた。腰紐一本がちているだけで真っ裸だった。十津川村から流されてきた人だと思うが、連絡をしても身寄りが見つからないまま仮埋葬をした。

水に浸かった家は、中に土砂が溜まったり物が流れたりして使い物にならなかった。

道路は途中までしか通じていなかったし橋もなかった。だから敷屋村は雨が降ったり川が増水すると孤立し、陸の孤島になった。増水時は渡し船が止まり郵便物が 3 日も 4 日も配達できないような状態だった。対岸の東敷屋地区の児童も渡し船が止まり子供が学校に行けなくなったので、古い机を青年クラブに運んでそこで勉強した。

当時、生活必需品の物資の運搬は川に頼り、災害後の救援物資は熊野交通の貨物船や川舟で運ばれ災害対策本部まで届けられた。農地復旧などして完全に村が落ち着くまでは 7，8 年はかかったと思う。

何と言っても、役場が全壊の被害を被ったことが一番の頭の種であった。床上には土砂が 60cm くらい堆積し窓枠は流れていた。

戸籍簿、土地台帳等重要書類は泥で埋もれて使用不可能の状態、諸用紙も同じで紙 1 枚もなく 1 年間くらいは小学校の 1 室を借りて災害復旧事務と日常事務を行う。

戸籍簿や土地台帳は臨時職員が配置され再製した。また、身分登録簿に至っては、千葉県銚子沖で漁師の方が拾ってくれたとのことで、郵便物で連絡あるも塩分を吸収しているし昔の手スキ紙使用のためドロドロの状態で使用不能であったと記憶している。

また、事務机が太地町海岸まで流れたとも聞いた。

未曾有の災害で途方にくれ、役場の位置も安全な所でなければならないと痛感した。

【災害対策】

急傾斜工事の採択基準を緩和し事前に工事を行ってほしい。それによって防げる場合もある。命に大きい小さいはないし、犠牲になる人が多いか少ないもない。たった一つの人命でもきちんと守ってほしい。

【教訓】

早く対策をしたので被害は少なくて済んだ。行政の力や情報提供、収集は大切。情報を聞いて危険を知ると気が引き締まる。油断せず危機感を持っておくこと。老人のためにも早期避難が大切だと思う。いざという時のため避難に必要なものを準備して袋等につめておくこと。

〔熊野川町〕ＴＳさん（男性）

昭和 28 年当時：年齢＝27 歳　職業＝小口村（現･熊野川町）職員

【被災時】

前日から雨が降り続いていたので 17 日から招集を受けて役場で待機していた。

あの当時、小口村では戦争中に軍の命令により材木を伐採して、中には植林した場所もあったが成長していない木や裸山が多かった。災害が大きかったのは小口村にとって一番大事な所だった。村内は東の川を挟んで 23ha と 17ha 程の農地が段々に広がっていた。

その年は梅雨が長くて、連続で 700mm 程の雨が降って、雨が山の表面に吹き付けたことで鉄砲水となって流れてきた。山肌を砕いて切り込み、木も全部一緒になって流れてきた。その結果、被害が大きくなった。

村内の比較的高台の家は被害を受けなかったが、鉄砲水が流れた沿川の田、畑、民家は全部流れた。みんな避難していたので人的被害はなかった。ものすごい大きな石が流れてきて地震のように感じて、じっと座っていられないような状態だった。東の川の川筋では巨大な天然石が流れてきて川の形がなくなってしまった。

【被災後】

当時、役場の職員は 5，6 人しかいなく、本当に昼夜問わず忙しく働いた。災害報告をするために村から新宮まで一日かけて歩き、翌日また一日かけて村に戻ってきた。普段ならバスで行くのだけど、災害によって交通不能になった。川も増水していたのでプロペラ船も動けなかった。

水が引いてから災害前と同じように水上交通を利用して物資の運搬をし特に困ったという記憶はない。少しして単車が普及した。歩いていたのでは間に合わないので病人が出た時は医者を単車に乗せて連れてきたり薬をもらいに行ったりした。

その頃は農地復旧の土木作業や水上交通の妨げになる石を除けたり船にも乗った。何でもした。よく災害が起こっていたのでそうしないと暮らしていけなかった。村が完全に落ち着きを取り戻すまでは 7，8 年かかったと思う。

【災害対策】

昔に行った工事場所を新しくしてほしい。草木が生えないと土砂が崩壊しやすくなるから山の手入れをしてほしい。命に大も小もないと思います。

【教訓】

備えあれば憂いなし。植林が大切だと思います。村長は「民家の近くには竹を植えよ」と言った。竹は根をよく張るので土砂が崩れにくいし水分もよく吸収する。川の近くの浸水しやすい場所には家を建てない。現在、村内にある有線は役に立ってます。「乾燥しています」と言われたら火の元に注意し、「台風が来る」と言われたらそれに備えることができます。情報を活かすことです。